060

令和７年度 名古屋市立大学　学校推薦型選抜Ａ

（人文社会学部　国際文化学科）

小　論　文

注意事項

１．　試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。

２．　問題冊子は４ページあります。

３．　解答はすべて解答用紙に記入してください。
　　　解答用紙は２枚です。

４．　この冊子は試験終了後、持ち帰ってください。

許可なしに転載、複製することを禁じます。

ハンナ・アーレント『暴力について』の抜粋を読んで、以下の問いに答えなさい。

権力は実際あらゆる政府の本質に属するが、暴力はそうではない。暴力はその本性からいって道具的なものである。暴力は、あらゆる手段がそうであるように、追求する目的による導きと正当化をつねに必要とする。そして、他のものによって正当化されなければならないものは、いかなるものであれその本質をなすということはありえない。戦争の目的—二重の意味で考えられるend[目的・終わり]—とは、平和か勝利である。しかし、それでは、平和の目的とは何か、という問いにたいする答えはない。有史以来戦闘が行われていた期間はほとんどつねに平和な時代よりも長くつづいているが、それでも平和は絶対的なものである。権力は同じカテゴリーに属する。権力は、いうなれば「目的自体」である。(これは、もちろん、政府があらかじめ定めた目標を達成するために政策を追求し権力を用いることを否定するものではない。しかし、権力構造そのものはあらゆる目標に先立って存在し、その後も残るのであるから、権力はおよそ何らかの目的のための手段ではなくて、実際、人びとの集団が手段-目的のカテゴリーで考え活動できるようにする条件にほかならない。)また、政府は本質的に組織化され制度化された権力であるから、政府の目的とは何かという当世の問題も大して意味をなさない。その答は、人びとが共に暮らすことができるようにするといった改めて質問をしなければならないようなものか、あるいは、幸福を促進するとか階級なき社会やその他の非政治的な理想を実現するというような、本気でためしてみたら何らかの暴政に終わるほかない危険なユートピア的なものかのいずれかになるであろう。

権力は政治的共同体の存在そのものにほんらい備わっているものであるから、いささかの正当化(justification)も必要としない。権力が必要とするのは正統性(legitimacy)である。この二つの語はよく同義語として扱われているが、それは服従と支持を等置する昨今の用語法と同じく誤解と混乱を招くものである。権力は、人びとが集まって一致して行為するときにはいつでも発生するが、しかしその正統性は最初に人びとが集まることによって由来するのであって、その後につづくであろうなんらかの行為に由来するのではない。正統性は、異議が申し立てられたときには、その過去に訴えることを根拠とするが、これにたいして正当化は未来にある目的に関連している。暴力を正当化することはできるが、しかし暴力が正統なものであることは決してないであろう。暴力の正当化は、それが意図する目的が未来へ遠ざかるほど真実味を失う。自衛のための暴力を疑問視するものがいないのは、危険が明らかであるばかりでなく現に存在しており、手段を正当化する目的が目前に迫っているからである。

権力と暴力は、はっきり異なった現象ではあるが、たいてい一緒に現れる。この二つが結びついている場合には、つねに権力の方が主要かつ優越した要因であることは知られている。けれども、権力と暴力がそれぞれの純粋な状態で問題とされるときには—たとえば外敵による侵略や占領のような—状況はまったく異なる。先に見たように、今日通例になってい

る暴力と権力の等置は、政府とは暴力の手段によって人による人の支配を行うものであるという理解に依拠している。もし外国の征服者が無力な政府と政治権力の行使に慣れていない国民に出会うとすれば、そうした暴力による支配を達成するのは容易である。それ以外の場合にはすべて困難はまことに巨大で、占領した侵略者はただちに傀儡政権を樹立しようとする。ロシアの戦車とチェコスロバキア人民のまったく非暴力的な抵抗との正面衝突は、暴力と権力とが純粋な状態で対決した典型的な事例である。しかし、そのような場合における支配は達成するのが困難ではあっても、不可能ではない。暴力は数や意見に依拠するのではなく、機器に依拠することを忘れてはならないし、また先に述べたように、暴力の機器は他のあらゆる道具と同様に、人間の力を増大し増幅する。権力だけによって暴力に対抗する人は、自分が立ち向かっているのが人間ではなく、人間が人為的に製作したものであり、その非人間性と破壊効果は敵との距離に比例して増大することにすぐに気づくであろう。暴力はつねに権力を破壊することができる。銃身から発する命令は最も効果的な命令であり、一瞬にして最も完全なる服従をもたらす。銃身からはけっして生じえないもの、それは権力である。

暴力と権力とが正面衝突する場合、結果はほぼ明らかである。もしガンディーの途方もなく強力で上首尾に運んだ非暴力的抵抗の戦略が、イギリスではなくて、他の敵―スターリンのロシア、ヒトラーのドイツ、さらには戦前の日本―にたいするものであったとすれば、結果は植民地からの脱却ではなく、大虐殺であり屈服であったことだろう。けれども、インドにおけるイギリスやアルジェリアにおけるフランスが自制したのにはそれなりの理由があった。純然たる暴力支配は、権力が失われたところで始まる。チェコスロヴァキア問題の「解決」で露わになったのは、ロシア政府の対内的・対外的な権力の収縮にほかならないが、それはちょうど脱植民地化か大虐殺かの二者択一において露わになったのがヨーロッパ帝国主義の権力の収縮であったのと同じである。権力の代わりに暴力を用いることで勝利は得られるが、その代償はきわめて高くつく。というのも、被征服者ばかりでなく、勝利者もまた権力の失墜という代償を支払わなければならないからである。それは、勝利者がたまたま国内に立憲的な統治形態という天の恵みを享受しうる場合にはなおさらである。ヘンリー・スティール・コマジャーがつぎのように述べるのはまったく正しい。「われわれが世界秩序を転覆し世界平和を破壊するならば、まず自国の政治制度を転覆し破壊することになるのは避けられない。」帝国主義の時代に大いに恐れられた、「被支配人種への統治」(クローマー卿)の本国の統治に及ぼすブーメラン効果とは、遠方での暴力による支配がイギリスの統治に影響を及ぼして、最後の「被支配人種」はイギリス人自身となるだろうということであった。最近バークレーの[カリフォルニア大学]構内において、催涙弾だけでなく、「ジュネーヴ協定に違反し、ベトナムで潜んでいるゲリラを狩り出すために軍が使用している」別種のガスまでが散布され、ガスマスクを着けた州兵が人っ子一人「ガス散布地域から逃れ」られないようにした事件は、この「巻き返し」現象の格好の例である。無力さが暴力を生みだすとはつねづねいわれてきたことだが、少なくとも精神的にも肉体的にも生まれながら力

をもっている人については、心理学的にいって、それはまったくそのとおりである。政治的にいえば、肝心なのは、権力の失墜は暴力をもって権力に代えようとする誘惑となるのであり一[中略]一、暴力それ自体が無力なものに終わるという点である。暴力がもはや権力によって支えられ制限されなくなったところでは、よく知られた手段-目的の転倒が起きている。いまや手段が、破壊の手段が目的を規定するのであり一その結果、すべての権力の破壊が目的となるのである。

権力に勝ったときに暴力が自滅するにいたる要因は、支配を維持するために行使されるテロルにも明白に現れるものだが、その異様な成功と最終的な失敗については、おそらくわれわれはこれまでのどの世代よりもよく知っているだろう。テロルは暴力と同一ではない。むしろ、暴力があらゆる権力を破壊してしまった後に、退位するどころか反対に全面的な統制をつづけている場合に生ずる統治形態がテロルなのである。テロルの効果が社会の原子化の度合いにほぼ完全に依拠することは、これまでもしばしば注目されてきた。テロルの力が目一杯発揮されうるには、それ以前にあらゆる組織された反対勢力が姿を消していなければならない。この原子化一その意味する恐ろしさに比べると何とも迫力に欠ける学術用語であるが一は情報提供者がそこかしこにいることによって維持され、強化される。情報提供者は文字通りどこにでもいるかもしれない。なぜなら、情報提供者とはもはや警察にやとわれたプロのスパイだけではなく、潜在的にはわれわれが出会うすべての人がそうであるからである。かくも全面的に発達した警察国家がいかにして確立され、またいかに作動するのか一というより、むしろ、それが支配権を握っているもとではいかになにごとも作動しないか一は、いまではアレクサンドル・I・ソルジェニーツィンの『第一圏』[邦題『煉獄のなかで』]から知ることができるが、この作品はおそらく二〇世紀文学の傑作の一つとして後世に残るであろうし、スターリン体制についての現存する最良の記録資料を含んでいることもたしかである。テロルにもとづく全体主義的支配と、暴力によって確立された暴政や独裁制との決定的な相違は、前者があらゆる権力を恐れ、自分の味方の権力すら恐れることによって、敵ばかりでなく味方や支持者をも離反させてしまうという点にある。テロルが頂点に達するのは、警察国家が自分の子どもたちさえ貪り食いはじめ、昨日の死刑執行人が今日の犠牲者になるときである。そして、これはまた権力が完全に姿を消す瞬間でもある。

ハンナ・アーレント著、山田正行訳『暴力について　共和国の危機』
(みすず書房、2000年)
なお、作問の都合上、一部を省略した。

注
テロル；恐怖、恐怖政治
原子化；人間を原子のように共通項なく、協力体制なく、個々に存在するようにさせること。

[問題 1]　以上の文章について、暴力とは何か、権力やテロルとの違いに留意しながら 400 字程度で要約しなさい。

[問題 2]　本文と同じ著者は、『エルサレムのアイヒマン』(大久保和郎訳、みすず書房、2017 年)では、非暴力的抵抗の好例を、ナチス時代のデンマークの振舞いに見出しています。その例とは、デンマークはドイツの友好国でありながら、ナチスのユダヤ人迫害に国王、議会ともに非暴力・不服従を貫き、それに対するナチスが精鋭部隊をデンマークに送ったものの、彼らの方が逆に、デンマークの方針に感化され「抵抗に直面したものの方が自分の考えを変え」るに至った、というものです(p.243)。アーレントは、これを指して、「すべての学生に、政治学の必須文献としてこの物語を推奨したい気持ちになる」(p.238)と語っています。

上記の『暴力について』の議論とこの例を踏まえたうえで、非暴力の可能性もしくは不可能性について 800 字程度で論述しなさい。